

精神現象學の成立史(完)

——ヘーゲル精神現象學の研究、——

四 現象學的危機

以上ヘーリングとホフマイスターとの所説の線に沿ふて、大筋に於てはそれを肯定しながら、私の觸れ得る限りの資料に基づいて、現象學の成立の跡を尋ねて來た。ここまでは今日一般にヘーゲル研究者たちによつて贊同されてゐる、ヘーリングの成立史に對してかなり批判的なグロックナーも、こゝまでは敢て反對しない。たゞヘーリングの現象學の成立史を讀むと、それが始めから計畫的に著作されたものでないことを強調するの餘り、現象學が如何にも一八〇六年の夏突如として恰も瓢箪から駒でも出るやうに生まれ出たものであるかのやうな印象を受ける。この點に關してグロックナーは少しく違つた見解を持つ。彼は現象學の成立を次のやうに解する、『戰爭のやうな出來事があつたにも關はず、ヘーゲルは約束を果すことが出來た。彼は自分の著作力を指揮した、——が自分の哲學的精神を指揮し得なかつた。彼の著作は成長して浩漭なものになつた。

米 倉 守

章節の區分や表題や(現はれなかつた)第二部に對する關係は變更された。がさう云ふ變化は有機的である。さう云ふ變化の行はれないのは、たゞ或書物が豫め綿密に確定された計畫に基づいて著作される場合に限る。プラトンのポリテュエアにせよ、カントの理性批判にせよ、或はその他の世界的な哲學文献の天才的な著作にしても、さう云ふ風に細部にまで互つて確定された考案計畫に基づいて著作されたものではない。が併しそれだからと云つて、それらは決して「ひそかに」、「無計畫的に」、「偶然に」生じたのではない』と(Hegel, II. S. 416)。この文面から知られるやうに、章節の區分や表題に變更のあつたこと、最初は論理學を主要内容とする書物を書かうとしてその入門的序説の部分を書いてゐるうちに、それがひとりでに大きくなつてそれだけで獨立した一卷の書物になり、論理學がそれから押出されたこと等に關しては、グロックナーもヘーリングと同様それを認めてゐる、彼は言ふ、『ヘーゲルがその論述を長い間後廻しにしてゐる體系のその部分を、今や入門的な第一部として

全體の前に置かれるやうになつた一卷の獨自の著作に脹れあがらせると云ふことは、最初からヘーゲルの意圖の中にはなかつた』と(Hegel, II. S. 393)、「ところがそれが書かれてゐるうちに、それは「二卷の獨自の著作に脹れあがらせられて、今や入門的な第一部として全體の前に置かれるやうになつた」のである、それでヘーリングが明かにした「精神現象學の成立史」はグロクナーもこれを認めるわけである。ただそれをヘーリングは「有機的でない」、「無計畫的である」、「偶然的である」と解するのに対して、グロクナーは、「さう云ふ變化は有機的である。」と解する(Hegel, II. S. 416)。どうしてかと云へば、それは、ヘーリングがたゞ諸々の歴史的资料に基づいて「現象學の外的成立史」を語るだけであるのに對して(Hegel, II. S. 416)、グロクナーはその外的歴史の根柢に内面的な哲學思想の變動を見るからである、現象學の著作途上に於ける構想計畫の變更は、このやうな思想的變動の外的表現に外ならない、と解するからである。

この現象學著作の根柢に見られるヘーゲルの哲學思想の變動を、グロクナーはローゼンクランツに倣つて「體系の現象學的危機」と謂ふ(Hegel, II. S. 392—417)。これは、ローゼンクランツがその「ヘーゲル傳」の中で始めて言ひ出したことである。彼はこの書物の中で、「一八〇七年までの體系の現象學的危機」と云ふ表題の下に現象學の成立の事情とその思想内容を簡単に紹介してゐる(Hegels Leben, S. 201—215)。「一八〇七年までの體系の現象學的危機」と云ふのであるから、それ

精神現象學の成立史

は當然ヘーゲル自身が現象學の完成された一八〇七年までそれを目ざして哲學して來た彼自身の體系の危機を意味するのであらうと解されるが、そのやうな意味はローゼンクランツの敘述の中には十分説き明かされてゐない。そこにはたゞ、現象學がそれまでヘーゲルが同調して來たシェーリング哲學からの完全なる離脱獨立であること(Hegels Leben, S. 201—202)、「そしてそれは同時にもつと普遍的な世界史的意義を持つてゐて、『現象學は二つの哲學の境界を絶對的に劃するものであるばかりでなく、同時に一般に二つの違つた世界觀の境界を劃するものである』(Hegels Leben, S. 206)、「現象學はそのやうな世界史的危機意識を背後地盤にして著作された、と云ふ意味のことが述べられてゐるだけである。だからローゼンクランツが「現象學的危機」と云ふのは、ヘーゲル自身のそれまでの哲學思想の内面的危機と云ふよりか、寧ろ現象學のヘーゲルに至るまでの全哲學の歴史の危機である、内に對する危機であるよりか、外に對する危機である、ヘーゲル自身の危機と云ふよりか、寧ろ人間歴史の危機である。ところがグロクナーの言ふ「現象學的危機」とは、そのやうな外に對する危機ではなくして、寧ろヘーゲル自身の内面的な危機である、「計畫的に體系を目ざして舵取り進んで來た」ヘーゲルの哲學的思惟が、現象學に於て「一つの危機的轉向」を持つたと云ふのである(Hegel, II. S. 393)。それはどう云ふことかと云へば、ヘーゲルがイエナに來た時(一八〇一年一月)、彼は既に豊富な學殖を身に着けてゐた、彼のフランクフルト時代(一七九七年一月—一八〇一年一

月)は、彼の内面的成熟期と言はれる、その時代の彼の深い研究は、周知のやうに今日ノールによつて纏められて「ヘーゲルの若い時代の神學的論文集」として公刊されてゐる、がその外にもなほ政治學や經濟學等に關する廣い社會科學的な研究もあつたらう。(Georg Lukacs, *Der Junge Hegel*, S. 177, 225)そしてこれらの研究成果は、後の精神現象學や精神哲學の貴重な素材になつて、その中に織り込まれてゐる。がフランクフルト時代のヘーゲルはまだ醗酵醗酵の中にあつて、彼の學問はまだ論理的に整齊され、體系的に秩序づけられてゐない、深遠該博ではあるが、まだ晦澁にして不透明である、それが論理的に精鍊され、體系的に組織づけられて、イエナ時代彼が好んで用ゐた言葉を以て言へば、「精神のエーテルとしての認識の透明性」を得て來るのはイエナ時代である (Rosenkranz, *Hegels Leben*, S. 179)。尤もこの體系的完成の仕事は、イエナ時代ではまだ漸くその緒にただで、それが成就されるのは次のニュールンベルク時代を経てハイデルベルク時代に至つてである。それでイエナ時代はちやうどその中間的過渡期になるわけである。このやうな事由から、イエナに來てからのヘーゲルの研究は、その各學期毎の講義表からも知られるやうに、始めから終りまで、いつも「論理學と形而上學」即ち「思辨哲學」の體系と、それを基礎にして展開される「自然哲學と精神哲學」との二つの「實在哲學」の體系とを包んだ「全哲學の體系」に向けられてゐる、簡單に言へば、論理學とそれを基礎にした全哲學の體系とが彼の主目標である、彼の著書に關係させて言へ

ば、これはニュールンベルク時代の大論理學と、次のハイデルベルク時代の哲學總論とに繋がる線である、これがイエナに來てからのヘーゲルの哲學思索の本筋である。グロックナーが「體系の現象學的危機」と言ふのは、ヘーゲル思索のこの線からの轉向である、現象學は「論理學—哲學總論」の線に對する「危機的轉向」の産物である、云ふのである (Glockner, *Hegel*, II, S. 393)。

どうしてこのやうなことが起つたか。外的事情としては、シユリングがイエナを去つてから(一八〇三年五月)遠慮なくシユリング哲學に對して批判的な態度を取ることが出来るやうになつたことや、新に哲學史の研究をしたこと(一八〇五から六年にかけての冬學期には講義表の上にも出されてゐる)等もそれに與つてゐると考へられるが、一番重要なことはやはりヘーゲル自身の哲學態度或は哲學の性格である。既にベルン時代からフランクフルト時代を通じて、ヘーゲルの哲學思索の對象は、いつも宗教とか道德とか政治とか經濟とか歴史と云ふやうな、人間の具體的な現實に屬するものであつた、「具體的なものへの衝動」がヘーゲル哲學の基調をなしてゐる (Glockner, *Hegel*, II, S. 396)。ところでこの具體的な人間の現實は、平板なる悟性の論理の届かない深みを持つ、非合理的なるものを持つ。そのためにヘーゲルは一時神秘主義にも心を惹かれたことがある、周知のやうに、ヘーゲルにとつては後年透明な辯證法の論理を得てからでも、「神秘的」は「理性的」や「思辨的」と同義であつた (System der Philosophie, I, S. 197—198)。

が神祕主義は、ヘーゲルは主に古代の東洋的神祕主義と、近世ではヤコブ・ベームのそれを考へてゐたやうであるが、その神祕主義は、「感情と學問との間の濁濁した中間物」ではない、「想像と感情とから離脱する」とも出来ないが、また最早ただの想像や感情でもない思辨的感情ではない、それは、「自分の内で醗酵してゐて白日の明るみに出ること出来ない、自分の無能力を痛々しく感じて、終に何等の決定にも到達すること出来ない痙攣の中にのたうち廻る肉なるもの」の戦ひ」でしかなく (Glockner, Hegel, II, S. 396—397; Rosenkranz, Hegels Leben, S. 182—183)。ところが學には透明なる論理が必要である。『透明なる元素は普遍的なるものである、何ものも覆ひ隠さない顯現の中に廣がりながら同様に深くもある所の概念である』(Rosenkranz, Hegels Leben, S. 183)。このやうな概念が學の存在する元素である。それで、ヘーゲルは悟性的思惟の一面性を指摘しながら、同時にその正當なる權利と必然性とを強調した。具體的なる現實を概念的に把握する、「純粹なる生を論理的に思惟する」、「このやうな風にヘーゲルは自分の哲學問題を捕へた。このやうな問題の捕へ方が、一方では絶対的論理學を以て始まる哲學總論の體系に彼を導いたのであるが、他方に於てはまた現象學の提示する新しい意識論の哲學にも彼を導いたのである (Glockner, Hegel, II, S. 397)。そしてヘーゲルにこのやうな現象學の道を思ひつかせたのは、彼が置かれてゐた哲學史的位位置である、カント以來のドイツ觀念論に對する新しい認識である。『我々が今日「ドイツ觀念論」と呼ぶ所

のもの、或は「ドイツ的運動」と呼ぶ所のもの——それはカントによつて全方面的に切り開かれ、フイヒテによつて力強く續行され、シルラーとシェリングとによつて天才的に生々と講述され、そしてヘーゲル自身に於て頂點を極めたあの理念の聯關である——その理念聯關がちやうどこの頃始めて全體としてヘーゲルの眼前に現はれて來た。この理念聯關の總括的概観が何よりも體系の現象學的危機を呼び起した所のものである』(Glockner, Hegel, II, S. 398)。と云ふのは、近世哲學はデカルトの Cogitatio の哲學から始まつた、意識の方法的考察が近世哲學の出發點をなしてゐる、カントの理性批判も意識論の哲學である、そこでは我々にとつて直接的な感覺的經驗的な意識でない先驗的普遍的な意識が発見された。がカントやフイヒテの先驗的意識の哲學は原理上二元論の上に建てられてゐる、そこでは二種の意識はたゞ絶対的に區別されただけである、シェリングの同一性哲學はそれを越えて、絶対的な無差別同一が絶対的な真理であることを説いた。が併しシェリングの絶対的同一性はまだたゞの「眞理自體」ではない、「意識の概念」ではない、そこではたゞ自然的意識と絶対的意識とが單純に、直接無媒介的に同一となされただけである。『この意識の概念をあらゆる段階を貫ぬいて意識の現實と媒介し、兩者を絶対的に相即すること、「自己意識」の同一性が直接的に(自體的に)それを示し、そして(先づ最初には「對自的に」認識せられた)「絶対的知識の理念」が「即自對自的に」それを要求するやうに、兩者を絶対的に相即すること、』このことが新に「壓倒的なる

明瞭性」を以てヘーゲルに解決を迫つて來た。そして其れはちやうど、『ヘーゲル自身もその哲學總論の作成に於てこの意識の概念に到達したその瞬間に、このやうな折返し (Umschlagen) の可能性ばかりでなく、その必然性をも彼は始めて認識した、とさう私は想像したい、』とこのやうにグロックナーは語つてゐる (Hegel, II, S. 400)。

それで、精神現象學は論理學—哲學總論の線とは違つた別の哲學の道である。論理學—哲學總論の線はプラトーン—アリストテレスに繋がる西洋哲學の長い傳統である、その考へ方は存在學的・形而上學的である。これに對して現象學の道はデカルトに始まる近世哲學の道である、その考へ方は意識論的・現象學的である。それで、我々は兩者に於て屢々同じ對象が取扱はれてゐるのに出會ふ、が併し兩者はその對象の出現する「元素」(Element)を異にする、論理學—哲學總論の體系は概念の元素に於て内容自體の發展として展開されるが、現象學の體系は意識の元素に於て意識の自己經驗の運動として展開される。が併しこの意識は、哲學總論の體系の中にも固有の位置を持つ、精神現象學はそこから「折返へして」意識自身の道を進み、意識の元素に於て、意識の運動を媒介にして同じ眞理に、同じ絶對的知識に到達するのである。が併し若しさうであるならば、このやうな「折返し」は意識の契機に於てだけではなくして、體系の何れの契機に於ても可能でなければならぬ、と云ふのは、『眞理は唯一にしてたゞ全體の體系だけだからである』それがどうして意識に於てだけ行はれて、他の契機に於ては行はれな

かつたか。これに就てグロックナーは次のやうに答へる。『ヘーゲルの全體系の中で、今一度全體をそのものに結びつけ、それから展開さすべく、意識程高度にこのことに誘ふ第二の點はなかつた、と云ふことはすぐ了解されることであつて、且つまたヘーゲルがカントの後繼者として置かれてゐた位置の中にも根柢づけられてゐることである』と (Hegel, II, S. 400)。それで、『ヘーゲルは決心した、意識をこのやうな中間者にして、全體の眞理を今一度こゝで描き示さうと、』が併し、『言ふまでもなく人はこの決心を、或定まつた日になされた精確な決意と考へなくともよい。ヘーゲルは著作中に始めて自分の企ててゐる事柄の意義と射程とが十分はつきり分つて來たと云ふことは、絶對にあり得ることであり、否寧ろ確にさうらしく思はれることである』(Hegel, II, S. 401)。否、『ヘーゲルは、自分の「發見の旅」を終らないうちには、自分自身にも自分の讀者にも、自分の目標に關して説明を與へることが出來なかつた。現象學自身の中では彼は夢遊病的な確さを以て行動してゐる。彼はまだ自分の道を全然見通してゐない、とさう云ふ感じを我々は持つ、』彼がこの自分の著作の概念を、その意義を始めて十分に認識したのは、彼がこの著作の本文を書き終つてから最後に書いた「序文」の中に於てである、とこのやうにまでグロックナーは述べてゐる (Hegel, II, S. 416)。こゝまで來れば、もうグロックナーとヘーリングとの隔りはなくなる、兩者の違いはたゞ、現象學の成立が「有機的」であつたか否かの一點に歸する。

この點に關しては、私はグロックナーの見解を取りたいと思ふ。精神現象學は、ヘーリングが言ふやうに、「内外の壓迫の下に」餘儀なく心にもないものが、「無計畫的に」、「偶然に」書かれたのではなくして、これもやはりヘーゲルの思索の中から正當に生まるべくして生まれ出たものである、この點に於ては後の論理學や哲學總論と少しも變りはない。たゞ先にイェナ大學の講義表や書簡等を資料にして明かにしたヘーゲルの著作計畫から知られるやうに、論理學や哲學總論には十數年に亙る長い思索推敲の期間がある、その間繰返し捲返し同じ對象が幾度も考へ直され、練り直されて、後の大論理學や哲學總論の大著に完成されて行くのである。ところが精神現象學にはそのやうな長い念入りな彫琢の期間がない、それが始めて表に名前を表はすのも、それが書かれてゐる眞最中の一八〇六年の夏である、それまでは一度も精神現象學と云ふ名稱はヘーゲルの講義の中にも著作計畫の中にも出て來ない、豫告される著作はいつも「論理學と形而上學」か「全哲學の體系」かである、即ち後の論理學と哲學總論とに連なるものである。ところがその論理學や哲學總論の完成は後廻しにされて、一度も豫告されなかつた精神現象學が突然に出されたのであるから、外的には如何にも精神現象學の出現は無計畫的偶然であつたやうに見える、即ちヘーリングの言ふやうに、それは「ヘーゲルに於て念入りに熟考され、長い問胸中に抱かれてゐた計畫に基づいて、彼のそれまでの發展から有機的に生じたものではない」かのやうな印象を受ける (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress,

S. 119)。がそれはたゞ表面だけのことで、即ち表面は偶然的であるやうに見えても、内面的には必然的なものがある、ヘーゲル自身の思想發展の上から見れば、精神現象學への轉向は必然的である (Glockner, Hegel, II, S. 393)、『この天才的の理念は、かの整然と哲學總論に向つて舵取り進む講義草稿の筆法では展開されることが出来なかつた。それはヘーゲルが、——自然哲學からは前進的に、人倫の體系からは後退的に同時に仕事を進めながら、——意識の中間者にまで推し進んで來た時に、突然ヘーゲルに現はれたものに相違ない。これは文獻學的・史實的には證明されない、これはたゞ哲學的に理解されるだけである。』とこのやうにグロックナーは解釋する (Hegel, II, S. 415)。とすれば、彼の言ふ現象學的危機とは、ヘーゲルの哲學思索の中に於ける純粹に内面的な出來事で、外面的にそれを證明する資料は精神現象學そのものより外にはないと云ふことである。と云ふことは、それはたゞ精神現象學の後からの解釋としてのみ成立すると云ふことである。これは可能である、出來上つた今日の精神現象學を論理學や哲學總論と對照して見れば、それは確に論理學—哲學總論の道とは違つた別の道であることを示してゐる。が併しそれが、グロックナーが力んで言ふやうに、『この知見が體系の烈しい危機を意味したことは明かである。ヘーゲルのやうに強い精神の人でないならば、こゝで絶望に捕へられたに相違ない。精神現象學の創作に導いた認識は、生死をかけた認識であつた』(Hegel, II, S. 401) と云ふやうに、實際ヘーゲル自身にそのやうに深刻に自覺されてゐた

ものであつたかどうか、それに就いてはヘーゲル自身は何事も語つてゐない。現象學を書くヘーゲルに一種の危機的意識のあつたことは否定されない、それは現象學自身の序文の中にも表明されてゐる、『我々の時代が誕生の時代であり、新しい時代への移り行きの時期であることを見るのは困難ではない。精神は今までの定在と表象の世界から別れて、それを過去に葬り去らうとしてゐる。自分自身を變革する作業の中にある』と(S. 113)。同じやうな危機的意識は、その頃ヘーゲルが折に觸れて表明したものらしく、現象學が書き出された一八〇五年から六年にかけての冬學期、ヘーゲルは始めて哲學史の講義をしたが、それは次のやうな言葉で結ばれた、『新しい時代が世界に生じてゐる。世界精神は今やすべての外的なる對象的存在を自分から除去つて、終には自分を絶對的精神として捕へ、自分にとつて對象的になる所のものを自分の内から産出し、それに對して落ちつきを以てそれを自分の支配力の中に保持することに成功したやうである。有限なる自己意識とそれにとつてその外に現はれた絶對的なる自己意識との戦ひは止んだ、云々』と(Rosenkranz, Hegels Leben, S. 201—202)。またヘーゲルは一八〇六年の夏學期始めて精神現象學の講義をした、先に明かにしたやうに、その頃は既に現象學の前半は印刷され始めてゐて、その印刷された部分は未完成のまま、聽講學生たちにも配布されて講義に使用されたやうである、そしてこの夏學期の講義がイェナに於けるヘーゲルの最後の講義になつた、一八〇六年九月十八日、その思辨哲學の講義を終るに當つて、ヘーゲルは學生

たちに次のやうに告げた、『諸君、これがその作成に於て私の到達した限りの思辨哲學である。諸君はこれを哲學思索の始めにして、自分で更に思索を續けて行かれない。我々は今重大なる時期に際會してゐる、精神が衝き動かされて今までの形態を乗り越え、新しい形態を得る醗酵の中に立つてゐる。今までの表象や概念の全體は、世界の紐帶は分解して、夢幻のやうに崩壞した。精神の新しい出現が行はれてゐる。哲學は特に精神の顯現を歓迎し、精神を承認しなくてはならぬ、が他のものは精神に對して無力に反抗し、過ぎ去つたものに執着し、そして大多數のものは無意識的に大きく塊りになつて精神の發現をなしてゐる。が併し哲學は精神を永遠なるものとして認識し、それに敬意を表せねばならぬ。諸君の温い思い出に別れを告げつゝ、諸君の樂しき休暇を祈らぬ』と(Rosenkranz, Hegels Leben, S. 214—215)。このやうに、現象學を書くヘーゲルは始めから終りまで激しい危機的意識の中にある。がこれは、それまで彼が確信を以て進つて來た論理學—哲學總論の線に對するものはなくして、時代全體の歴史哲學的認識に繋がるものである、ヘーゲル自身の内面的な思想的轉向に由來するものではなくして、同時代の哲學全體に對する官戰布告に伴ふものである、今まで手を携へて來たシェリング哲學をも含めて、當代の哲學のすべてを非哲學として過去に葬り去らうとする峻烈なる哲學的審判に源するものである。グロックナーがヘーゲルの現象學的危機をパトス的にも證明するものとして引用したイェナ時代の哲學ノートの中に書残されてゐる短文の中に讀み取られる危機

的氣分も、すべてこのやうな時代批判に關はるものである。そしてヘーゲルが、先に引用した現象學の序文や二つの閉講の辭の中で、精神の「新しい時代」が來てゐるとか、精神の「新しい世界」とか、「新しい形態」とか、「新しい出現」とか「顯現」などと言つてゐるのは、「學」のこのやうな (Phänomenologie, S. 18—19)。哲學は長い間「知識への愛」であつたが、その「知識への愛」と云ふ名稱を脱ぎ棄てて、今まさに「現實の知識」にならうとしてゐる。「哲學を學に高めることが今正にその時である」(Phänomenologie, S. 14)。「精神現象學はこのやうな軒昂たる歴史哲學的時代認識の下に、時正に熟してゐる世界精神の最高の事業を遂行すると云ふ氣負ひ立つた精神を以て著作された。ローゼンクランツはその「ヘーゲル傳」の「現象學的危機」の章で『現象學は絶對的に二つの哲學の境界を劃するものであるばかりでなく、同時にまた一般に二つの違つた世界觀の境界を劃するものでもある。これはヘーゲル自身が力強く、特に改まつた儀式的な席や、閉講の辭や、教授就任の講演や、序文の中などで表明した意識である。人類の精神はこの著作の中で一瞬間立ち停まつて、それまでに自分が自分の概念に對して一體何になつてゐるかを説明する。精神は自分の全過去を一々精査し、ヘーゲルを自分の哲學的ダンテに仕立てて、意識を自然性の地獄から、人間の倫的行爲の煉獄を通り抜けて、宗教的和解と學的自由との樂園にまで導き上げた、』と言つてゐる (Hegels Leben, S. 206—207)。これは明かに精神現象學が全精神史の發展に一時期を劃したと云ふことである、精神が

その概念に於てある所のものに、學になつてゐることを自ら認識したと云ふことである。これならばヘーゲル自身もさう言つてゐることであり、また現象學の敘述も實際さうなつてゐるのであるから、我々にも首肯される。が現象學が、イエナ時代を通じてヘーゲルが辿つて行つた論理學—哲學總論の線に對する危機的轉向から書かれたと云ふことは、ヘーゲル自身はどこにも述べてゐない。グロックナーは先にも引用したやうに、『ヘーゲルはその哲學總論の作成中意識の概念に到達したその瞬間に、このやうな折返しの可能性のみならず、その必然性をも認識した』と言つてゐるが (Hegel, II, S. 400)、併し現象學の書かれる直前、即ち一八〇五年から六年にかけて彼が講義した精神哲學の體系は、後の精神哲學のそれとはかなり隔りのあるもので、且つまたそこでは意識はまだ精神の主要契機として取出されてゐない、それが始めて精神の現象形態として規定されるのは、寧ろ精神現象學自身に於てである。だから、哲學總論の作成が意識まで進んで來た時に、このやうな「折返し」の可能性と必然性が認識され、それが實行さるべく決意されたと云ふことに就ては、私としては確信を持ち得ない。イポリットもその詳細なる現象學の研究に於て、無論ローゼンクランツの「ヘーゲル傳」もグロッナーの「ヘーゲル」も目を通してゐるやうであるが、「體系の現象學的危機」と云ふやうなことには一言も觸れてゐない。グロックナーは先にも引用したやうに、『これは文獻學的・史實的には證明されない。それはたゞ哲學的に理解されるだけである』と言つてゐるが (Hegel, II, S. 415)

哲學史的解釋にはやはりそれを裏づける「文獻學的・史實的證明」もあつてほしい。

(一) これは最初ローゼンクランツの「ヘーゲル傳」の中に収録されていたが、今日はホフマイスターの編輯にかかる「ヘーゲルの發展の記録」の中に載録されている。ローゼンクランツはこのノートの原物を知つていたらしいが、それは今日は傳はらない。

かう云ふわけで、私はグロックナーの現象學的危機の考へに對しては肯定的的態度を取りかねる。が併し若しそれを次のやうに解釋し直してよいならば、私はそれを認めてよいと思ふ。

精神現象學の道は何と言つても論理學—哲學總論の線とは違つた別の哲學の道である。そしてヘーゲルがイエナに來てから始めから終りまで辿つた道は論理學—哲學總論の線である。精神現象學はこの線に對しては確に途中からの「折返し」である、もう一度始めに戻つてそこから出直すことである、論理學の始めそのものを固め直すことである。これならば實際ヘーゲルが遂行してゐることであり、また彼が現象學の序文や序論やその他の箇所にもはつきり言明してゐることもであるから、十分了解することが出来る。そしてこのやうな現象學へのヘーゲルの思惟の發展は、「偶然的」とか「非有機的」などと言はるべき性質のものではないと同様に、それはまた論理學—哲學總論の線に對しても「危機的轉向」などと言はれねばならぬ性質のものでもないであらう。と云ふのは、論理學—哲學總論は始めから思辨的思惟の地盤の上に立つて理性の絶對的眞理の體系

として展開される。がそれは我々の日常的思惟にとつては遠い彼岸の遠方でしかない、我々の日常的思惟は直接的感覺的な自然的意識の立場で働いてゐる、その論理は抽象的な悟性の論理である。だから思辨哲學と日常的思惟とはその立場も論理も異なる、現象學自身の中で用ゐられてゐる言顯し方へ言へば、兩者に於ては眞理が「顛倒」(verkehren)する (Phänomenologie, S. 20)。そのやうな日常的思惟に對して哲學は如何にして自分の眞理性を證明し、それを日常的思惟にも了解させることが出来るか、また日常的思惟は如何にして哲學的知識の眞理性を教へられ、それにまで導き上げられることが出来るか、そしてこの二つの事柄が偶然的非學的な道によつてではなくして、必然的な學の道によつて成就されねばならぬ、これが精神現象學に負はされた課題である。この課題が果されることによつて、論理學—哲學總論の立場が日常的思惟に對しても學的に、そして同時にまた教育的にも固められるのである。だから現象學の著作が一時論理學—哲學總論の線を中断したと云ふことはあつたとしても、それに對して「危機的轉向」を意味したなどとは考へにくい、寧ろ哲學を眞實の學に高める、長い間哲學の名稱であつた「知識への愛」を「現實の知識」にする、と云ふ強靱なる學的哲學への意志が、一時論理學—哲學總論の線を中断して、先づその立場を學的教育的に固める精神現象學を書かしたものであらう。さうすると、これは論理學—哲學總論を始めから支配してゐた學的哲學への意志の自覺と自己實現として、兩者は同じ哲學的精神によつて貫かれてゐると見ることが

出来るであらう。

このやうな精神現象學への準備がヘーゲルに於て爲され始めたのは、大體一八〇四年頃からのことであつたらしい。これに就てローゼンクランツは次のやうに報告してゐる、『近世哲學は全體として自己意識の概念から生じた。豫感に満ちた確信を以てシェリングは主觀的觀念論に客觀的觀念論を附け加へた。が併し主觀と客觀との統一は彼に於てはたゞ假定でしかなかつた。ヘーゲルは自己意識の概念を絶対者の概念の中ばかりでなく、或は一般に理性の概念の中ばかりでなく、精神の概念の中でも單なる契機として止揚した。併し同様にまた彼は、いろいろな形態の下にいつも自己意識の制限として繰返し現はれて來る實體性の概念に關しても同じことを爲した。それで彼は、先づその論理學と形而上學との序説の中で、意識が自分自身について爲す經驗の概念を展開した。そこから一八〇四年以來現象學の基礎が生じた、が彼はその中に當時彼が持つてゐた極めて實質に富んだ研究成果を堆積させた』と (Hegels Leben, S. 202)。「意識が自分自身について爲す經驗の概念を展開する」のは正しく「意識の經驗の學」である、さうするとヘーゲルはそれを一八〇四年頃から講義の中で論理學への入門的序説として説いてゐたわけである。がヘーリングは更に溯つて、このやうな序説への道はイエナ時代の始めから描き示されてゐたことを説いてゐる、そしてその證據として彼は「初期のイエナの體系」の中から次のやうな一文を引いてゐる、『非哲學的な思惟は先づ直觀から出て、即ち多なるものがただひとり無關係に

(gleichgültig) あると云ふことから歩み出て、多なるものはそれ自身に於ては全くたゞ反對のものへの關係に於てのみ存在する、相互の差別としてのみある、と云ふことの認識に登らねばならぬ』云々 (Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 134)。なるほどこゝには非哲學的思惟から哲學的認識への向上が説かれてゐる、これは正しく精神現象學が描き示した道である。さうすると精神現象學と云ふ概念や名稱が固まつたのは一八〇六年の夏頃であつたとしても、その理念は、それに到る思想的素地は、既にイエナ時代の始めから準備されかけてゐたわけである。だから、それは一八〇六年哲學總論の作成がちやうど意識の段階にまで來た時に、突然内面的な思想的危機として電光のやうに閃き出たやうなものではない。

五 精神現象學の完成

出版書肆ゲーバルトとの紛争とその解決、後半の部分の原稿の慌だしい仕上げとその送達等に關しては既に述べたが、それに關聯してなほ一二補足すれば、印刷の遅延に關してはヘーゲルの方にも一部その責がありはしなかつたか。前に述べたやうに、前半の部分の印刷は復活祭までに仕上げると云ふ約束であつたのに、それが八月頃になつてもまだ出來ないので、ヘーゲルは切りにゲーバルトの不信を語り、その態度の不都合なることを訴へてゐるが(一八〇六年八月六日附ニートハンマー宛の手紙)、それに就てヘーリングは、ヘーゲルの方でも復活祭までに印刷出来るやうに原稿を送らなかつたのではないか、

と云ふのは、ゲーブハルトとの間に出版の契約が結ばれたのは一八〇五年の終りから翌六年の始めにかけてのこと、推定されるが、その學期の講義豫告の中には著書公刊のことが全然語られてゐない所から察すると、ヘーゲルはまだ出版契約成立の頃には前半の原稿を完成してゐないで、多分その冬學期の講義が終つてから起稿の暇を得て書き上げたのではなかつたか、さうするとゲーブハルトの手に渡されたのは早くて次の（一八〇六年の）夏學期の始まる前、従つて復活祭の後ではなかつたか、と云ふやうな推測をしてゐる（Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 128）。がこの推測を疑はしくするやうな資料もある。と云ふのは、ヘーゲルは例の一八〇六年八月六日附のニートハンマー宛の手紙の中で、『印刷は二月に始められてゐる、そして最初の契約によればこの部分は復活祭までに出来上らねばならなかつた、僕はそれから講義の始まるまで譲つてやつた、——がこれも亦履行されなかつた……』と零してゐる、さうすると原稿は大體適當な時期に渡されてゐたものと推測される。またホフマイスターは、ヘーゲルが一八〇五年の夏學期の始め「急ぐ仕事」のために講義を一週間づつ二回延ばしたことを學生たちに傳へた揭示文の下書が残つてゐるが、この「急ぐ仕事」も、またその頃フォスに當てた手紙の下書の中にある、『研究成果を秋には哲學體系として出すやうになりませう』と云ふその「研究の成果」も、何れも現象學の前半の部分の著作に關係してゐる、従つてゲーブハルトとの間に出版の契約が成立した頃には、原稿の作成はもう相當に進捗してゐたと云ふこ

とが、「確實と見なされ得る」²⁾と云つてゐるが（Einleitung des Herausgebers, S. XXXI）。これも推測であるから、すべからさうと極めることも出来ない。が少くとも一八〇六年の八月にはまだ後半の原稿が出来てゐなかつたことは確かである、これはゲーブハルトとの純れが片づいてから、原稿送達の厳しい期限が定められ、それに間に合ふやうに起稿を急いで、その後三回に分けて原稿を送つてゐることが、ニートハンマー宛の手紙ではつきりしてゐるからである。それでまだ執筆中の後半の原稿がどれ位のものなるか、それをヘーゲルの方でもはつきり示すことの出来なかつたのも無理はなう（Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 128）。がこれではどこまでが半分であるか分らないわけであるから、先づ後半の原稿を渡してもらひたい、でなければ約束の原稿料は支拂へない、と云ふゲーブハルトの言分にも無理からぬものがある。この経緯から推して、印刷の遅延についてはヘーゲルにも一部その責があつたのではないかと推測される。がゲーブハルトの方も、『彼は僕が手紙をやつても、いつも返事もよこさないで其れを無視し、自分の好き勝手に振舞ふと云ふ不都合な仕打をする。』とヘーゲルがニートハンマーに訴へてゐることから（一八〇六年八月六日附ニートハンマー宛書翰）、またニートハンマーもヘーゲルに當てた手紙（一八〇六年九月十二日附）の中で、ゲーブハルトの手紙を「實に無禮な手紙」と怒り、彼自身を「ならず者」とまで呼んでゐることから察すると、あまり紳士的な態度は取つてゐなかつたのではないかと推測される（Hoffmeister,

Einleitung des Herausgebers, S. XXXVII^o。

(一) この揭示文の下書は、フォス宛の書翰の三つの草稿のうちホフマイスターが「主稿」と呼んでゐるものの一部を書かれてゐる紙の裏側に書かれてゐる(Hoffmeister, Briefe von und an Hegel, I. S. 457)。

もう一つ、イエナ會戦との關係。現象學の成立に關して古くから一つの傳説が傳へられてゐる、それは、『ヘーゲルはイエナ會戦の砲聲の轟く中にその精神現象學を書き上げた』と云ふことである。この傳説の源は、エドゥアルト・ガンスがプロシヤの官報に載せるために書いたヘーゲルのネクロロークである。がこの文章が虚飾であることは既にその頃から知られてゐたらしく、その後間もなく(一八三五年)に出されたフリードリッヒ・カップの「ギムナジウムの校長としてのゲオルグ・ウルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲル」と云ふ小さな冊子も次のやうな言葉で書き出されてゐるさうである。『イエナ會戦の砲聲の轟く中にヘーゲルはその精神現象學を書き上げた。度々繰返して語られたこの事實の報告を、人は虚飾されたものと考へた。が我々はこの報告を以て我々の敘述を始める』と(Kuno Fischer, Hegel, I. S. 71)。²『この度々繰返し語られた報告は、虚飾されてゐるだけでなく誤つてもゐる』とクノー・フィッシャーも言ふやうに(Hegel, I. S. 71)、これはヘーゲル自身がニートハンマーやシェリングに當てた手紙の中に書いてゐることも一致しない。イエナ會戦は十月十四日のことであるが、ヘーゲルが現象學の最後の幾頁かを書き上げた

精神現象學の成立史

のはその前夜のことであつた。このことがはつきり語られてゐるのは、現象學が完成してからそれの獻本を贈呈するについてシェリングに送つた手紙(一八〇七年五月一日附)の中だけである。そこにはかう書かれてゐる、『僕は原稿の作成をどうにかイエナ會戦の前夜半に終つた』と、イエナ會戦の前夜半は十月十三日の夜半である。が同夜十一時頃に書き終られたニートハンマー宛の手紙には現象學脱稿のことは全然觸れられてゐない。數日して十月十八日附のニートハンマー宛の手紙にはかう記されてゐる、『月曜(十月二十日になる)にまた最初の郵便が出ます、馬車の便も馬の便も。だからそれで最後の數ボーゲンを送ります。僕はそれをあの大火の爲の恐ろしい夜書いた手紙と一緒にそれ以來いつもポケットに入れて持ち廻つてゐます』と。「大火の爲の恐ろしい夜」と云ふのは、イエナが焼かれた十月十三日の夜のことであらう。こゝにも現象學の脱稿については何事も語られてゐないが、その最後の數ボーゲンの原稿を同じ十三日の夜書いた手紙と一緒にポケットに入れて持ち廻つてゐると言つてゐるのであるから、先に引用したシェリング宛の手紙(一八〇七年五月一日附)とも照らし合せて、現象學の最後の脱稿は遅くともイエナ會戦の前夜のことであつて、決してイエナ會戦の砲聲の轟く中に書き上げられたのでないことだけは明かである。ヘーゲルに關する簡単な傳記が始めて印刷された書物の中に載せられたのは、一八二七年に出されたブロックハウス百科辭典の第五卷であるが、そこにはやはり、ヘーゲルは『イエナ會戦の前夜に原稿の最後の幾頁かを書き上げ

た。』と記されてゐる（Hoffmeister, Einleitung des Herausgebers, S. XXXVI）。これは右に引用した二つの書翰に於けるヘーゲル自身の報告とも一致する。ガンスのネクロロームの中の文句は多分これを「ジャーナリストイックに潤色した」ものであらう、とホフマイスターは言つてゐる（Einleitung des Herausgebers, S. XXXVII）。

(1) これはその後ガンスの文集（一八三四年）第二卷「二四二頁—二五二頁に再録されてゐる（Rosenkranz, Hegels Leben, S. X）。

それで、ヘーゲルはイェナ會戦のさ中に冷然として現象學の筆を走らせたのではない、現象學はその前夜に脱稿されてゐたのである。がナポレオンがプロシヤの最後通牒を受取つたのが十月七日で、即日彼はバンベルクから全軍に開戦の布告を發しつゝ（Hoffmeister, Briefe von und an Hegel, I. S. 463; Karl Hegel, Briefe von und an Hegel, I. S. 65）。だから砲聲の轟く中で書き上げられたのではないが、戦雲たゞならぬ慌だしい空氣の中で、一方ではきびしい原稿送付の最後の期限（十月十八日）の切迫に苛立ちながら、他方では極度の經濟的窮乏に耐へながら、氣力を振り絞つて書き上げられたものであることは想像される。もう一つヘーゲルが氣遣つたのは、戦争のために郵便業務が亂れて、原稿が間違ひなく届くかどうかと云ふことであつた。十月十三日のニートハンマー宛の手紙は次のやうな言葉で書き始められてゐる、『先に前週の水曜（十月八日）と金曜（十月十日）とに發送した原稿のことを僕がどんなに心

配しなければならぬか、日附からお察しいたゞきたい。』と。また同じ手紙の中程でももう一度繰返して、『全體の外的情況から推して、水曜と金曜とに發送した僕の原稿が着いたかどうか、僕は疑はずにはゐられない。』と。また當時ヘーゲルが金に窮してゐたことに就ては、ゲーテやグリース等も語つてゐるが、殊にゲーテはそのために心配もしてやつてゐるが（Hoffmeister, Briefe von und an Hegel, I. S. 464）。ヘーゲル自身もやはりニートハンマーに當てた手紙の中で幾度もこの點に觸れて、この親切な友人の配慮を乞ふてゐる。例の十月十三日附の手紙の中では、『どうかして僕にいくらかの金を送ることの出来る方法をお聞きになつたら、どうかすぐさうしていただくやうに、切にお願ひする、僕は間もなくそれがどうしても入用になりませう』と言ひ、また十月十八日附のニートハンマー宛の手紙の中でも、『が併し僕は貴兄にどうしても一つお願ひを申し上げねばならぬ、どうかぜひ金を送つていただくたい、僕は焦眉の必要の中にある。……結果はやはり貴兄にお金をお願ひすると云ふことです、たとひたゞの六カロリンか八カロリンでも、どうかゲープハルトの方の見込みがなくても、僕はその方は確かだと思ふが、どうかこの好意を僕のために持つていただくやうにお願ひ申し上げる。』と書いてゐる、ヘーゲルが當時如何に金に窮してゐたかが想像される。また精神現象學の著作には直接關係はないが、現象學を書くヘーゲルに當代の英雄ナポレオンがどのやうに映つてゐたか、ヘーゲルは同じ十月十三日附のニートハンマー宛の手紙の中でそれに觸れてゐるから、

序に引用して置く。『皇帝が——この世界靈魂が——偵察のために乗馬で市中を通つて行くのを見た、——このやうな個人を、この一點に集中して、馬上に跨がつて、世界を覆ひ世界を支配するこのやうな個人を見るのは、實に不思議な感じだ。』

……が併し木曜（十月九日）から月曜（十月十三日）までにこのやうな進展を見せることは、たゞこのやうな異常なる人間にのみ出来ることで、こゝろやうな人間を讚嘆しないと云ふことは出来ない」と、ナポレオンの中に祖國の侵略者を憎み、この戰亂の最大の責任者を非難することも忘れて、「世界を支配する世界靈魂」を、「異常なる人物」を讚嘆してゐる。

ともかくこのやうな異常なる情況の中で精神現象學の最後は書き上げられた。が先にも述べたやうに、戰爭のために郵便が杜絶してすぐ送ることが出来ないで、同夜書いたニートハンマー宛の手紙と一緒にポケットに入れて戦禍を避け、十月二十日に發送してゐる（十月十八日附ニートハンマー宛書簡）。そして翌十一月の中頃ヘーゲルは自分でバンベルクに行つて現場で印刷の校正をしてゐる。年が明けるとまたすぐイェナに歸つて、一月三日附シェリングに當てて、『僕は随分前から——既に去年の復活祭にも、貴兄に僕の研究成果の一部をお送りすることが出来るやうに希望した——そしてそれがまた僕が長い間御無沙汰したことの原因でもあつた——が併し今僕はとうとう印刷の終るのを待つてゐる。そしてそれを——それはまだほんの始めてしかないが、尤も始めとしては随分濃厚なものであるが、——それを今度の復活祭には貴兄にお送りすることが出

精神現象學の成立史

來ませう、』と書き送つてゐる。がまた序文が残つてゐる、それが書き上げられて發送されたのは一月の十日である。この點ヘーリングは誤つてゐはしないか、彼はかう言つてゐる、『續いて序文の原稿もやつと一八〇七年一月十六日に發送された、そしてそれ以前には恐らく書き上げられてゐなかつた』と（Verhandlungen zum Dritten Hegelkongress, S. 120）。ヘーリングは何に基づいてかう言ふのか、その根據になる資料を示してゐないが、若しそれが一八〇七年一月十六日附のニートハンマー宛のヘーゲル自身の手紙であるならば、それはこの手紙の讀み違ひではないか。と云ふのは、この手紙にはかう書かれてゐる、『貴兄のこの前のお手紙は、親愛なる友よ、その宛名の上に記された書留の故に、僕はそれを土曜日（の正午）受取るべきところを朝受取りました、それに報いて、僕は同日序文の原稿をゲーブハルト宛に送りました』と。この「土曜日」は一月十日になる、その朝にニートハンマーからの書留郵便を受取つて、『同日』序文の原稿をゲーブハルトに送つてそれに報いたと云ふのであるから、明かに一月十日に送つてゐるのである。このことを述べた後でヘーゲルは書き上げられた現象學に關して次のやうな感想を漏らしてゐる、『誤植を直すために最後の通讀をしながら、僕は無論こそ、そこでもつと底荷を降ろして、船を輕快にすることが出来たらと云ふ願望を持ちました。——が間もなく出るのであらう第二版に於て、——若し神々の御心に適ふならば、何もかもよくしたい、それを當にして僕は自ら慰め、他の方々もそれに希望を繋いでいたきたい、』とヘーゲ

ルは出来上つた精神現象學に十分の満足は表明してゐないが、ともかく多年の研究成果を一巻の書物に纏めて公刊し、獨立した自分の體系の全展望を示し得たのであるから、内心決して不満足ではなかつたであらう、ともかく彼はこれで宿願を果して、この數年來念頭を離れなかつた重荷を降ろし得たのである。その後序文の校正をニートハンマーに頼んだらしいが、ニートハンマーはそれを断つた、それに就てヘーゲルは二月二十日附の手紙で次のやうに言つてゐる、『貴兄が序文の校正を断つたことは不思議には思はない、何しろこの印刷に關することはあき／＼することだから』と。それでヘーゲルは三月になつて自分でバンベルクに行つて序文の校正をしてゐる。そして翌四月にいろ／＼な困難のあつた精神現象學をやつと日の目を見たのである。四月七日附ニートハンマーに當てた手紙の中で獻本贈呈のことを次のやうに依頼してゐる、『何よりも先づ僕は貴兄が親切にも持つて行つて下さつた獻本の精しい處理について何も申し上げてゐなかつた、それを今こゝで申し上げたい。假綴された三冊のうち、羊皮紙の一冊はゲエテに、寫字紙の分は樞密顧問官フォイクトに、もう一冊の羊皮紙の分は貴兄に當ててあります。假綴されてゐない三冊のうち、一冊はどうかフロンマンに送つていたゞきたい、御承知のやうに假綴させる暇が、製本させる餘裕がなかつたのです。それから製本されてゐないあとの二冊はどうかもう一度お返ししていたゞきたい、その代りにこゝにフロンマンに當てた二冊の指圖書を同封して置きます、それは今日中にもゲーバハルトから僕の方に送

つてくれませう。そのうち一冊はクネーベル少佐に、他の一冊はゼーベックに届けさせていたゞきたい』と。それから少し後れて五月一日附の手紙でシェリングにも、『僕の著書がとう／＼出来上りました』と言つて一部送つてゐる。その手紙の中で現象學について次のやうに述べてゐる、『この第一部の考へについて、これはまだ本當に入門であるが、——と云ふのは入門を越えて中心部には僕はまだ這入つてゐないのであるから、この第一部の考へについて貴兄が何と言はれるか、僕はそれが伺ひたい、』と先づシェリングの批評を求め、次いで敘述の體裁に移つて、『細目に互つて論述したことが、全體の概觀を妨げたやうに僕は感ずるが、併しその全體はその本性上極めて錯綜した迂餘曲折を持つてゐて、それを一層よく際立たせようとは、それは一層明確になされ、一層よく仕上げられるまでには、なほ多くの時間を要するであらう。——個々の部分もまたそれを征服するには、なほいろ／＼な細かな研究を必要とすることは申し上げるまでもない、』と全體についても部分についてもなほ至らぬ點のあることを語り、殊に、『最後の部分の甚だしい不出來は、どうか貴兄の寛容さで、僕が原稿の作成をどうにかイェナ會戰の前夜半に終つたと云ふことで大目に見ていたゞきたい、』と自分でもその「甚だしい不出來」を認めてゐる。續いて、序文の中でシェリング哲學に加へたあの無遠慮な批評はさすがに自分でも氣にかかつたと見えて、『序文の中で貴兄は、特に貴兄の諸形式に關して甚だしい亂暴な取扱ひをし、貴兄の學を空虚な形式主義に陥れたあの凡庸さに對して、僕が餘りにひ

どのことをしたとお考へにならないうせう、』とそれがシェリング自身に向けられたものでないことを断つてゐる。そして最後にはまた辭を低うして、『なほまた、全體のそこばくの面が貴兄に是認していただけるならば、それは僕にとつては他の人々が全體に満足であるより以上に、或は全體に不満であるより以上に重大である、と云ふことは貴兄に申し上げるまでもないことです。同様にまた僕はこの書が誰によつてよりも貴兄によつて世間に紹介され、この書についての意見が貴兄から與へられるのを望むより以上に、さうしていたゞきたい人を僕は知らない』と重ねてシェリングの批評を乞ふてゐるが、この手紙に對するシェリングの返事はなか／＼に出されないうで、ちやうど半年の間そのまゝに放置されて、十一月二日附でシェリングはやつとこの手紙に答へてゐる、而もそれまでにシェリングはこの書物を讀んでもゐなかつたのである。先にヘーゲルが現象學の印刷中であることを告げた一月三日附の手紙に對しては、折返し十一日附で、『とう／＼出ることになつた貴兄の著作に對して僕は緊張した期待に満たされてゐる。貴兄の成熟がなほその果實を成熟させる時間を得るならば、さぞかし素晴らしいものが生ずるに相違ない。僕はかくまでに眞價ある、言はず時流を越えた著作を完成するために、この上とも更に貴兄のために安らかなる状態と閑暇とを祈る』とまで言ひ送つたシェリングであつたが、『貴兄の本を受取つてから、貴兄に返事を書く前に、僕はそれを讀みたいと思つた。ところがこの夏はいろいろな差支へがあつたり、うき晴らしすることがあつて、このや

うな著作の勉強に必要な時間も落ちつきも得ることが出来なかつた。そのために僕はまだ今日までに序文だけしか讀んでゐない、』といきなり興奮めた氣持を表明し、『貴兄自身序文の攻撃的な部分についてどんなに述べようと、僕は僕自身についての僕の考への正しい物指に當てて、その攻撃を僕自身に向けられてゐるものとするには、僕は僕自身を除くにも小さく考へねばならぬであらう。だからそれは、貴兄が僕に當てた手紙の中で述べてゐるやうに、たゞ僕の形式を濫用する者や僕の口眞似して喋る者のみ向けられてゐるのかも知れない、尤もこの區別はこの著書自身の中では爲されてゐないが、』と當てつけ、『我々が實際どう云ふ點に於て信念や意見を異にするかは、我々の間では和解なくしても簡単に、明瞭に發見され、解決されるであらう、と云ふのは、たゞ一つのことを除けば、すべてのことが和解されるのであるから、』とどうしても一つのことだけは和解出来ないことがあつたらしい。それが何であつたかは無論知りやうもないが、イポリットはその現象學の翻譯に附けられた註釋の中で、これを、ヘーゲルが現象學の序文の中で、『病氣には無力病と強力病と間接無力病とがあつて、同様にまたそれだけの治療法がある、と云ふ理論が四分の一時間のうちに教へ込まれないやうな頭は、そしてこれだけの授業を受くればこの間までは理論的醫者になるのに十分であつたのであるから、この僅かな時間のうちにたゞの經驗家から理論的醫者になり變はれないやうな頭は、餘程遲鈍であるに相違ない、』と言つてゐる箇所に關係させてゐる (Hegel, *Phänomenologie*, S. 47—48;

Hypnotisme, Phénoménologie de l'Esprit, tom. I. p. 44)。この
 病理學的理論は、その頃少し前一七八〇年にイギリスの醫學者
 ジョン・ブラウンが「醫學原論」の中で發表したもので、シェ
 リングはこれを一七九九年に出した自分の「自然哲學體系の第
 一考案」の中で採用してゐる。ヘーゲルの毒舌が若しこのこと
 に關係するのであるならば、これはもう學說や思想の批評の限
 界を越えて人身攻撃になつてゐる、シェリングが治まりかねた
 のも無理はない。最後に二人の考へられる根本的な點に觸
 れて、『貴兄が概念を直觀に對立させる意味を僕は今日までま
 だ理解してゐない、と云ふことを僕は認める。がその概念の下
 に、貴兄は貴兄と僕とが理念 (Idee) と呼んで來た所のもの以
 外の何ものをも意味することは出来ない、理念の本性は正に概
 念である一面と直觀である一面とを持つと云ふことだからであ
 る、』と詰寄つてゐる。がこの手紙に對してはもうヘーゲルの
 方からは再度何も答へられなかつた、精神現象學は二人の哲學
 の分離となつたばかりでなく、また二人の交友關係の斷絶とも
 なつた。

六 精神現象學が出てから

現象學が出てから半年程して、一八〇七年十月二十八日の
 「イェナ一般文學新聞」の廣告紙上に、現象學に關するヘーゲ
 ル自身の自家廣告が出された。これは現象學の課題や性格を簡
 潔に要約してゐて、現象學の理解に資するものを持つから、こ
 こにホフマイスターがその編輯にかゝる現象學の新版に附した

解題の中に再録してゐるものから譯出して置く。

『新刊書の廣告』

バンベルクとヴェツブルクのヨゼフ・アントン・ゲーブハル
 ト書店の出版の中に、ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリッ
 ヒ・ヘーゲルの學の體系、第一卷、精神の現象學を含む、大八
 つ折判、一八〇七年、定價六フロリン、が出されて、すべての
 よき書店に送られてゐる。

この卷は生成しつゝある知識を描出する。精神の現象學は知
 識の根據づけに關する心理學的説明や、或はまたそれに關する
 より抽象的なる論議にも代はるべきものである。それは學への
 準備を、それ自身一つの新しい興味ある學であり、哲學の第一
 の學であるやうな一つの觀點から考察する。それは精神のいろ
 いろな形態を、精神がそれを通つて純粹なる知識になる、或は
 絶對的なる精神になる道の宿驛として自分の内に包む。だから
 この學の大きな區分の中では、それはまた多くの小さな區分に
 分かれるが、そこでは意識と自己意識と觀察的理性と行動的理
 性と精神自身とが、人倫的精神と教養的精神と道德的精神とし
 ての、そして最後にはまた宗教的精神としての精神自身とが、
 その種々の形態に於て考察される。始めて見る目には混沌とし
 て現はれる豊富なる精神の現象が、一つの學的秩序の中に齎ら
 される、現象學はそれをその必然性に從つて敘述するのである
 が、その中で不完全な現象は解消して、そのすぐ次の眞理で
 あるより高い現象に移つて行く。そしてその最後の眞理を、こ
 れらの精神現象は先づ宗教の中に見出し、次に全體の結果とし

ての學の中に見出す。

序文の中では、著者は、哲學の現在の立場に於て哲學の要求は著者にとつて何であるやうに見えるかと云ふ點に關して、更に現在哲學の權威を失墜させてゐる諸々の哲學様式の思ひ上りや不法に關して、また一般に哲學や哲學の研究に於て重要な點に關して、自分の見解を表明してゐる。

第二卷は、思辨哲學としての論理學の體系と、哲學の残りの二つの部門の體系、自然の學と精神の學とを含むであらう。

ヘーゲルは自分の精神現象學をこのやうに理解してゐたのである。この自家廣告文から、現象學に續いて出さるべきであつた、そして遂に出されなかつた「第二卷」は、その内容の上から見て正に後の「哲學總論」になるべきものであつたことが知られる。とすれば、精神現象學を書いた頃のヘーゲルは、精神現象學を第一部とし、後の哲學總論を第二部とするやうな哲學體系を構想してゐたわけである。そして晩年現象學の改訂を企てた時、これは周知のやうに彼の急逝のために序文の途中まで止められたが、ヘーゲルは最初精神現象學に附けられてゐた「學の體系の第一部」と云ふ限定語を削つた。このことは、彼が現象學起稿當時持つてゐた體系構想を改めてゐたと云ふことを意味する。現象學はいつの頃からか體系の外に出されて、哲學總論だけで哲學の全體系をなすやうに改められてゐたのである。

現象學の批評もなか／＼現はれなかつた、『當時既に盛んであつた批評界もこの著作の前には殆んど完全に口が利けなかつ

た、』とホフマイスターは言つてゐるが、批評界も簡單に片づけた、』との出来なかつた有様が想像される (Hoffmeister, Einleitung des Herausgebers, S. XXXIX)。がヘーゲルの友人たち

や知人たちが漏らした感想は一致して、『思想の深さには感嘆するが、併し同時に理解しよさと判明性との缺けてゐるのを憾む』と云ふことであつた (Hoffmeister, Einleitung des Herausgebers, S. XXXIX)。その代表的なるものとしてこゝにクネーベルがヘーゲルに當てた手紙(一八〇七年九月十一日附)の中で漏らしてゐる感想を紹介して置く、『さて貴君の方のことで、貴君の最近出された哲學について語りたが、——若し私がそれを讀んでゐたならば。その序文はゼーベックからもらつた、私は貴君の深い思惟する精神には驚嘆した。この上の私の願ひとしては、そしてこれは恐らく幾人かの友人たちにとつても同じであらうと思ふが、貴君の細密な思想の網を、それは所によつては極めて明快に氣持よく輝き出る所もあるが、それを我々の弱視の眼にももつと感覺的に分かりよく書いて置いてもらつたら、と云ふ願望が残る。眞實我々は貴君を當代第一級の思想家と思つてゐる、が併し我々は、貴君がその精神的な力にもつと具體的な形態を與へて置いてくれたらと望んだ』と。シエリングが現象學のヘーゲルを快く思はなかつたことに就ては既に述べたが、彼は一八〇八年七月三十日ヴィンディッシュマーンに當てた手紙の中で、『貴兄がヘーゲルをどのやうに扱つてゐるか知りたい、あの糾髮病のもつれ髪を貴兄がどんな風に解きほぐしてゐるか見たい、望むらくは貴兄がこの糾髮病を敬神

的な面から取らなかつたことを、同様に彼が自分の個人的性格に合ひ、それに許されてゐることを、一般的な標準にしようとするあのやり方を見のがすこともよくない、』と注意して、現象學のヘーゲルを「糾髮病のもつれ髪」(Weichselzopf)にしてゐる (Hoffmeister, Briefe von und an Hegel, I, S. 477)。このヴィンディッシュマンによつて始めて、それも現象學が出てから殆んど二年近くもたつた一八〇九年二月になつて、始めて現象學に關する本格的な書評が、「イェナ一般文學新聞」紙上に(二月七日—十日)發表された。その結びの部分が、ホフマイスターの現象學解題の中に、またやはり同氏によつて編輯されたヘーゲル書簡集のヴィンディッシュマンからヘーゲルに當てた手紙(一八一〇年四月二十七日附)の註釋の中に引用されてゐるから、それによつてその内容の一端を窺へば、『我々がヘーゲル氏を完全に理解したかどうか、それはヘーゲル氏自身の判定に任せる、我々としては我々自身を理解した、が併しこれが正にこの著作に於けるこの著者の最深の意圖である。が著者の論述の仕方について言へば、我々はそこに屢々どの契機の考察に於ても我々の心の琴線に觸れるやうな種類の必然性の無いのを感じた。この著者の論述の仕方は屢々硬くて無味乾燥で、對象を克服するより以上に克服しにくい。且つまたかう云ふ研究の始めに於ては十分理解し得ることではあるが、この論述の仕方は對象の周りを確信なく動き廻り不安げにためらひながら、最後にやつと對象に確實に命中すると云ふことも稀でない。果實はまことに立派である、莢は熟すれば自ら落ちる。』と述べて

ゐる。これだけの文面から察しても、この書評は決して現象學に對して理解あるものでなかつたことが推測される、ホフマイスターの批評によれば、それは「極めて冗漫な、才氣走つた、饒舌的な」ものであつたらう (Hoffmeister, Briefe von und an Hegel, I, S. 496; Einleitung des Herausgebers, S. XXXIX)。次に述べるバッハマンはその現象學紹介の中で暗にヴィンディッシュマンを指して、「シェリングに追隨する形式主義者」と評してゐるからであるが (Hoffmeister, Briefe von und an Hegel, I, S. 498; Einleitung des Herausgebers, S. XXXIX)。シェリング哲學がその追隨者たちに於て陥つて行つたその形式主義こそ、ヘーゲルがその現象學の序文の中で手厳しく攻撃してゐる所のものである。が「どの契機の考察に於ても我々の心の琴線に觸れるやうな種類の必然性の無いのを感じる」と云ふことは、ヴィンディッシュマンだけでなく、外にもなほ同様な感じを持つた者があつたやうで、例へばファン・ゲルトはヘーゲルに當てた手紙(一八一〇年九月二十一日附)の中で、ハイデルベルクの學生から聞いたとして、『シエルヴァーでさへも、尤も私はそれを容易に信するわけにはいかないが、貴兄の現象學を理解しないばかりか、それには學的秩序が缺けてゐるやうに感ずる、と彼に公言したさうです。』と知らせてやつてゐる。現象學の紹介として一番重要なのはバッハマンのそれである、彼はイェナでヘーゲルの講義を聴いた學生の一人であるが、彼は一八一〇年のハイデルベルク年報の第一分冊の中に始めて詳しい現象學の紹介を出した、ホフマイスターによれば、これはそ

れ以後今日までヘーゲルの評價に對して言はゞ「ミトスを作るもの」になつたものがある (Hoffmeister, Einleitung des Herausgebers, S. XI.)。私としては無論原文を見ることは出来ないが、その主要部分がホフマイスターの現象學解題とやはり同氏の編輯にかゝるヘーゲル書翰集のヴィンディッシュマンからヘーゲルに當てた手紙 (一八一〇年四月二十七日附) の註釋の中に抜粹されてゐるから、それによつてその内容を窺ふことにする。パッハマンは先づシェリングとヘーゲルとの結びつきから説き起して、『シェリングは今日力強く、且つ本當に熱狂的に、あの古い神聖な、が併し今日はもう遠く忘れ去られてゐる、自然の神的性質や物の生命についての教説を説き、それを時代精神の思ひ上りに反對して盛んにしようとする人であつた。彼と結んで、そして同じ理念に魂づけられて、深遠なるヘーゲルが登場した、が併しシェリングが名聲を博して新しい學派の創始者になり、指導者になつたのに對して、ヘーゲルには講義の巧みさがなかつたために、自ら譲つて快く友人の氣に入つた機關になりながら、靜かにより大いなるものを思惟して行つた。が併し少數の者だけは、その頃でもシェリングが如何に多くのものをヘーゲルに負ふてゐたかを知つてゐる、』と表面はヘーゲルがシェリングに同調し、シェリングの「氣にいつた機關」に甘んじてゐた時でも、内實的には既にシェリングから獨立したものを持つてゐたことを述べ、次いで兩者の性格の相違に移つて、『若し人が、この二人の者が協力して發行した哲學批評雜誌の中の兩者の論文をもつと仔細に検討するならば、人は當

時既に二人の違つた性格を發見するであらう、それが今や學の體系が出版されてからは、殆んど完全な對立をなすやうになつた、』と現象學の刊行が二人の性格の對立をあらからさまにしたことを述べ、續いて兩者の性格の實際の違ひに説き及んで、『シェリングに於ては想像力が優勢で、快適な、人を魅了し去ることも稀でない講義振りは、屢々講義されるものを犠牲にしてそのやうに行はれた、否その講義振りは、或はこれに反對する人もあるかも知れないが、嚴密に學的な敘述の場合には、有利でないやうにすら見える、この提言は、彼のこの種の試論に於て (例へば思辨的物理学雜誌の中の) ……十分にはつきりと證示されるであらう。それに加へて、彼の著作は一般に攻撃的な傾向によつて、或は彼が戦ひを交へねばならなかつた時代精神に向ふことによつて、内實に於て失ふ所が甚だ多かつた、』と先づシェリングの學風を述べてヘーゲルに移り、『ところがヘーゲルにはそのやうなもの全然無い、彼に於ては寧ろ理性がその全き強さに於て現はれる、そして既に彼の初期の批評も、(例へば反省哲學の批評)、偶然的なるものを差置いてまつすぐ本質的なるものへの方向を取り、本質的なるものをして自己を固守させる、と云ふことによつて注目されるものを持つ、然り、彼の全體の努力は、哲學に嚴密なる學の形態を與へると云ふことを目ざす、かくて個々の契機は何れも必然的な制約されたものとして現はれる、或は哲學は體系になる、』とシェリングに對照させてヘーゲルの「理性の哲學」を、「嚴密なる學の體系としての哲學」を際立たせ、更に詳しくヘーゲルの性格に

立入つて、『が併しそれには、一つには、一切の思辨的なるものの關はる唯一最高のものを凝然と注視するための大いなる深さが必要であり、次には、個々のものを窮め解明するための非凡なる明察力が要求される、そして最後には、敘述はたゞ本質的なるもののみ向けられるのであるから、それは外的の絢爛さを無視して、たゞその眞理性によつてのみ人の心を惹きつけようとする、そのためには粗い、硬いと思える危険を冒しても、そのやうな敘述が要求される、——簡単に言へば、ヘーゲルが稀なる程度に持つてゐるあの性質が、その性質の故に、若し人がシェリングを現代のプラトンと呼ぶならば、ヘーゲルはより大いなる正當性を以てドイツのアリストテレスと呼ぶことが出来るであらう、あの性質が要求される、』と二人をプラトンとアリストテレスとに比較して、ヘーゲルの學的事業を直ちにアリストテレスのそれに結びつけ、『そのアリストテレスの精神に完成を與へる、即ちそれに學的形態を與へる、と云ふ最後のことが今日まだ缺けてゐる、このことは既にアリストテレスも努力したことであるが、今や過去と現在との極めて多方向的な經驗と大いなる富とが蓄積された後に於ては、このことはアリストテレスの當時よりもなほ一層可能である。このことこそ、ヘーゲルが今我々の前に出されてゐるこの著作の中で始めたこととであり、従つて哲學の歴史の中に一つの新しい時期を劃する所のもの、それが完成された暁には、正に思辨の誇りと呼ばれてよい所のものである。なぜかと云へば、その時には哲學はプロソポピアであるのではなくつて、眞實にソポピアに、或

は知識にならねばならぬであらうから、そしてこのことに貢獻することが、或は寧ろ、「哲學が知識への愛であると云ふ名稱に反いて現實の知識になるために、哲學はどのやうにしてこの名稱を脱却することが出来るか、それを示すことが、この著作の高遠なる目的である、これは言ひ争ふまでもなく、この名稱がピタゴラスによつて用ゐられて以來の最大の企てである」と現象學の序文の中のヘーゲル自身の言葉を引用しながら、現象學の「高遠なる目的」を紹介し、それはピタゴラス以來の長い哲學の歴史に最後の完成を與へようとする哲學史始まつて以來の「最大の事業」であると稱揚してゐる。一方ではこのやうな理解ある讃辭に迎へられながら現象學は讀書界に出て行つた、それはその異常なる難解さの故に讀書人に「分かりにくい」と啣たれながら、その異常なる「深さ」の故に不思議に讀書人の心を惹きつけた。このことはそれが出版されてから一世紀半を経過した今日に於ても變はらない。(完)

(筆者 佐賀大學文理學部「哲學」教授)

And the transcending of time is done by the love for truth. For augustinian love (caritas) has always the mental faculties intending for and participating in truth. The intending movement includes, at the same time, the participating trend. But there is the moving conversion of love. Seen from the intellectual side, this love has two characteristics; the active thinking which asks truth and the passive one which answers the revelation of truth. We cannot separate these two characteristics, but only find distinction between them correlating to the objective characters of truth. So also is to be given distinction and not separation between reason and faith.

Further, participation in truth based on love leads to the systematization of all beings as the ontology of love. And ultimately the union of God the Truth itself and human mind is to be found in the trinitarian mysticism. From this point of view I want to examine the problems of reason and faith in the theology of Augustine.

***Über die Entstehung der „Phänomenologie des Geistes“**

von Mamoru Yonekura

In betreff der Umstände der Entstehung der „Phänomenologie des Geistes“ können wir das Ergebnis der Untersuchungen Haerings (in seiner „Entstehungsgeschichte“) als allgemein anerkannt ansehen. Es bleibt jedoch noch einige Fragen übrig. Sie gehen die folgenden Punkte an.

1. Der Ursprung der Untersuchung. Man merkt es wohl, daß die „Phänomenologie des Geistes“ an der äußeren Form eine merkwürdige Unvollkommenheit und auch inhaltlich eine Inkonsequenz zeigt. Der bekannte Streit Hegels mit dem Verleger hängt damit zusammen. Aus diese Tatsache gehen meine Untersuchungen aus.

2. Der Beweggrund der Verfassung. Hegel hatte schon in Jena, von Schellings glänzenden Tätigkeiten angeregt, eine Absicht, sein eigenes System in einer abgeschlossenen Gestalt zu veröffentlichen. Seine Absicht wurde bekanntlich in seiner „Phänomenologie des Geistes“ verwirklicht. Ich versuchte hier, hauptsächlich auf seinen damaligen Vorlesungsverzeichnissen und Briefwechseln beruhend, die Verhältnisse, welche darin führten, klarzu-

machen.

3. Der Prozeß der Verfassung. Es ist leicht zu sehen, daß die Darstellung der „Phänomenologie des Geistes“ eine Scheidung in zwei ungleiche Hälften verrät, nämlich zwischen „C. (AA.) Vernunft“ und „(BB.) der Geist“; hier unterbrach auch Hegel einige Zeit lang seine Absicht. Dieser Umstand hängt mit einem Streit mit seinem Verleger, Joseph Anton Göbhardt, zusammen, zugleich aber enthält er ein Problem in sich, das, wie Haering meint, die Komposition der „Phänomenologie“ selbst und darum auch ihre Auslegung angeht. Auch der Titel „Phänomenologie des Geistes“ wurde aller Wahrscheinlichkeit nach an dieser Zeit festgesetzt. Diese Verhältnisse habe ich einigermaßen aufzuklären versucht.

4. Gegen Haerings „Entstehungsgeschichte“ verfechtete H. Glockner „die phänomenologische Krisis“ als die Grundlage der Verfassung der „Phänomenologie“. Ich habe seine These im Zusammenhang mit der Ansicht Haerings beurteilt.

5. Zuletzt sind über die Vollendung der „Phänomenologie“, die Sagen darüber, die Bearbeitung der Vorrede, die Veröffentlichung des Werkes und die Beurteilung des damaligen Publikums erzählt.

* For the Japanese original of this article, see Vol. XLI, No. 1, & No. 2.

On Christian Wolff's Theory of Definition.

—A Study of the Philosophy of Wolff, No. 2—

by Tadasu Hosokawa

We have already seen that Wolff to think fundamental notions as to be clear and distinct faces us to the difficult conclusion: „notions must be proved“. (See my argument at The Journal of Philosophical Studies, Vol. XXXIX No. 4 P. 74.)

Our arguments, then, are as follows.

1) When the notions consisting the foundation of *Ontologia artificialis* must be proved, without the proof-needless basic notions, the more we will prove any notions the more we shall need the more basic notions forever. Now we must find out the vicious circle in the definition itself.